

「漫画学」講座——ゼミの実体化：新しい学問を始めるには

日下, みどり
九州大学比較社会文化研究院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/16797>

出版情報：日下翠教授中国文学・漫画学著作集成. 8, pp.2-3, 1998-07. 九州大学大学院比較社会文化研究科

バージョン：

権利関係：

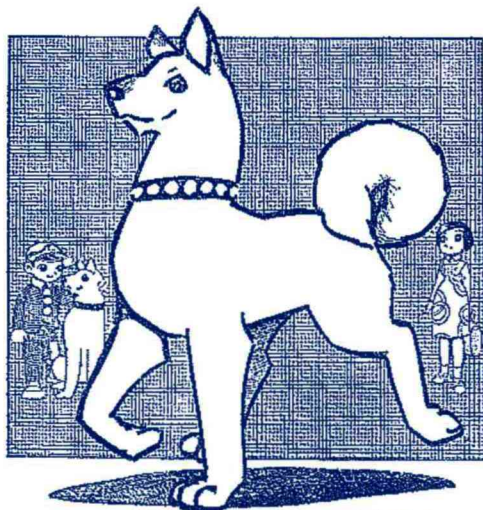
「漫画学」講座—ゼミの実体化

新しい学問を始めるには

日下みどり
(アジア社会講座)

「漫画学」はまだ学問として社会的に認知されたわけではありません。従って、「漫画学」という言葉は正式にはまだなく、まして「漫画学講座」というものがこの大学院にあるわけでもありません。でも、研究をすればそれは学問になり、公の名前はなくとも、教師と学生さえいれば、それはゼミとして実態化できるのです。

比較社会文化研究科の設立の主旨は、21世紀を見据えた新しい学問です。社会の激しい変化の中、従来に無かった物や現象が夥しく産み出されています。それらに対する新たな研究が必要なことはいまでもありません。



永島慎二

しかし、残念ながらそれらの変化に研究が追いついていないのが現状です。

漫画に対する研究の遅れもその一つでしょう。漫画はすでに質、量ともに文学と肩を並べ得る存在になっています。どころか、社会へ対する影響力の大きさは、すでにそれ以上といえるかもしれないのです。

それなのに、未だに本格的な研究所はありません。

さいわい比較社会文化研究科では、各学生が自分の好きなコースメニューをデザインできるというメリットがあります。つまり組合わせしだいで、幾らでも自分の好きな研究テーマを選ぶ事が可能なのです。つまり、正式に講座名が出ていなくとも、ここで「漫画学」（とりあえず「漫画」を使って研究するものすべてを「漫画学」と呼ぶ事にします）を研究することは十分可能なのです。

指導教官団は、自分が研究したいテーマにあわせて教官を選べばよいのです。理系の先生でもよいですし、社会学、文化人類学の先生を選んでも構いません。

例を挙げてみますと、次の先生方は、漫画でこういうことができると考えています。

阿尾安泰：漫画の「語り方」の枠組みがどのような文化的条件の規定を受けているのか、いかなる権力関係を前提にしているかなどの問題を考える。

花田俊典：表現のレベルとして「言語と文芸」を考えるならば、たとえば小林よしのりマンガにおける差別論とか、鉄腕アトム論で博士号を取得する人が登場することも考えられると思う。

松村瑞子：漫画にみられる言葉とジェンターの関わりについて考える。

因 京子：漫画を、文化や社会に関する総合的教材として、日本語教育に利用する。

日下みどり：少女漫画を通じ、社会や文化の急激な変化による、女性の意識の移り変わりを読み取る。

この他にも、

- 1、文学と同じ方法で、作家論や作品研究、評論等をおこなう。
- 2、漫画をモデルに、世界各地での日本文化の受け入れられ方について調べる。特に、誤解や偏見が現われた部分に、面白い調査結果がでると思われる。
- 3、少女漫画に現われた女性の意識の変化。
- 4、漫画にみる現代の若者の恋愛観。
- 5、産業としての漫画、アニメを考える。特に経済効果は無視できないであろう。
- 6、大衆文化研究の一環として漫画を考える。

7、レディースコミックから見た夢と欲望を通じ、現代女性の意識をさぐる。

など、色々のアプローチが可能だとおもわれます。特に漫画は、若者文化を理解するための最良のテキストでもあるのです。

養老孟司は「現代の日本社会での、若い人たちの男女関係の理解は、むしろ漫画を抜いては考えられないかもしれないのである。かつて若者がそうしたことを考えるための材料に、文学を読んだとすれば、いまではマンガがその肩がわりをしている部分がある。」と述べています。確かに現代の若者にとって漫画の影響は、小説以上のものがあるでしょう。

例えばテレビドラマなどは、小説よりむしろ漫画が

原作の作品が多いようです。テレビの人には、今の若者の姿は小説よりむしろ漫画に、一番新しい姿が現われるという事が分かっているのでしょうか。「現代」が最も先鋭的に反映されているのはむしろ漫画なのです。

肝心なのは成果です。すぐれた成果（論文）さえあれば、「漫画学」は社会的に認知されてゆくでしょう。何はなくともすぐれた人材があり、良い論文を書いて発表してゆきさえすれば、それはやがて正式な学問として社会に認められるでしょう。

その実態化の第一歩が、この大学院の、表には名前が出ない「漫画学講座」であるかもしれないのです。

